

山口西田讀書会プロトコル

Oct. 10. 2020 奈原伸雄 記

I 前回(9月26日)講読内容の整理：西田幾多郎『働くものから見るものへ』表現作用六 167頁10行～七 170頁5行

「真の实在は、自己自身を表現するものでなければならぬ 1)」。ここで強調される「表現」とは、「自己が自己の根柢に還ることによって 2)」、そこから翻って「自己自身の内容を説明すること 3)」である。その際、自己の根柢に待機する「直観 4)」というものが、根源的意志能力の「バネ」になる。「すべての作用の終極とも考ふべき直観から出立して 5)」、多くの情報と情熱が行き交う「意志と知識との両方向の交叉点 6)」を経由して、俗世たる「実在界を含む 7)」形で、意志を実現するのである。例えば、「家を造るといふ場合も 8)」、家庭という不幸と世間体という「生存欲 9)」を包み込み、真の「存在*」の住まうトポスを形成せんとするならば、これは「一種の意志の実現と考え得るであろう 10)」。「風吹く今日の春の日に、あゝ、家が建つ家が建つ(中原中也「はるかぜ」)。借家の「憂鬱」に沈む詩人にも、窓の外から鉤が醸す檜の芳香が漂うと、詩作の力は確かな律動を得て、「僕の家ではないけれど(中原前掲書)、誰も「本当の家」を次々と建築して行く。

このように、「言葉によって表現せられる意味の世界は、時と人とを離れ、それ自身に於いて永遠なる世界である 11)」。しかし、同じ言葉による表現でも、「思惟の内容は超越的ではあるが、自己自身の中に質料を有せない 12)」。「理屈」は骨組みであっても真の中身にはなり得ない。例えば、中也の「あれ(中原中也「言葉なき歌」)は「あれ」であり、これに形而上学的原理を充て込んだり、詩情に「純粹経験」の「構造」を援用してはいけぬ。これに対し、「芸術」には「時其物を中に含む永遠なる實在の相を見ることが出来る 13)」、と言いながら、それでも、芸術が常に「否定と表現」の真のダイナミズムを含んでいるかという点になると、西田としてはどうも物足りない。芸術の「作用其物が直に表現となる 14)」という器用さが却って短所になるのかもしれない。

そして、いよいよ「我々の身體は叡知的性格を宿す一種の表現 15)」であると位置づけ、すべての理想と現実の、実現と調和を一身に担う「身體に於いて、表現の内容、作用、表現其物が一 16)」となり、「道徳的行為とは 17)」正しくこのように「我々の身體を表現すること 18)」であると断言する。さらに、「宗教的立場に於いては、全實在も亦唯一種の実現と見られる 19)」と述べて、この章を締め括る。どうも、「心身脱落」が「脱落心身」に向かう気配がする……。

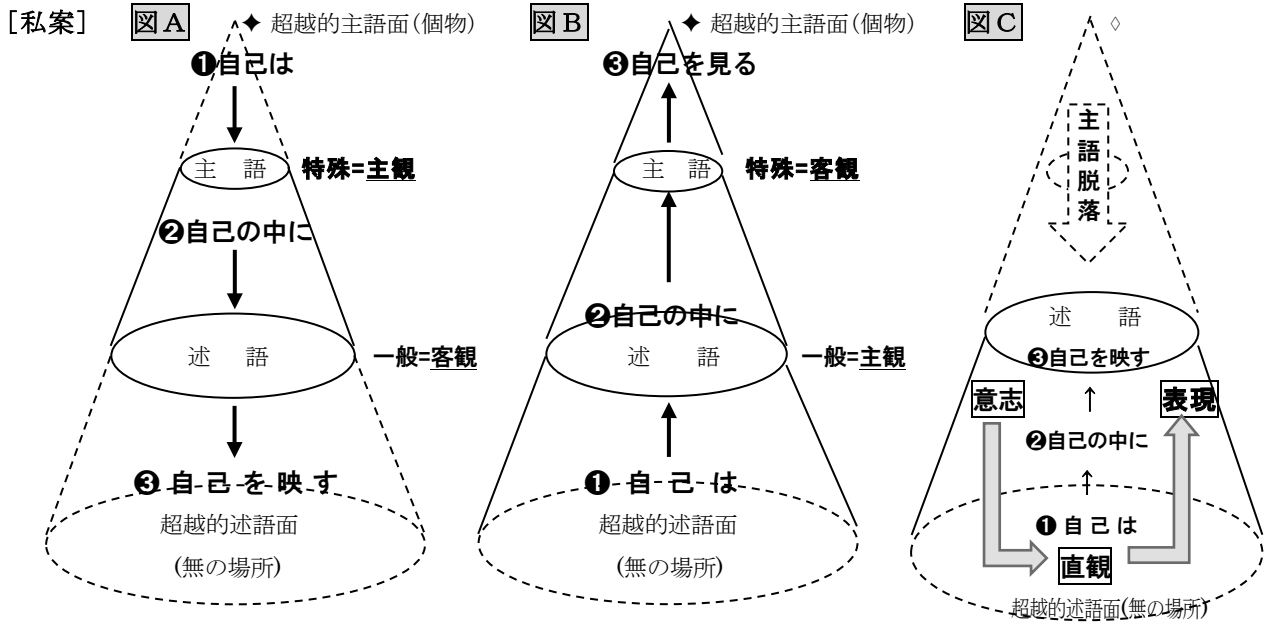
次に、第七章に入ると「表現作用」の総括に向かい、「自己否定」はいよいよ極まり、対照的に「表現作用」の肯定的側面が浮き上がる。曰く、「働くものは時に於いて働き、時は自覺の形式であって、種々なる作用は自己が自己の根柢に還ることにより 20)」より、そこで「時が時自身の内容を得ることによって、種々なる作用が成立する 21)」。ただし、「自覺の最も深き根柢には自覺其物をも否定した立場 22)」、「即ち意志否定の立場 23)」がなければならず、「此立場に於いて我々は自己其物をも対象化し得るのである 24)」。「此立場が即ち直観の立場 25)」であり、ここではもはや「時其物も消滅して、萬物は表現となる 26)」のである。

言葉は難解を極めるが、我々は既に「至高の境地」に誘われているのかもしれない。この段は、問わず語りに、あるいは言外に、「仏に逢うては仏を殺し(『臨濟録』)、その上で、自己が「有-無相對」を支える「絶対の無」という磐石の根柢を手中に収めたと言っているのかもしれない。それであれば、これから、「哲学」が、道徳・芸術・宗教を説得し、イデア・神・理性から「無」が至高の地位を継承する、「破壊的創造劇」の顛末が語られなければならない。

《引用》『西田幾多郎全集(旧版)第四卷』(岩波書店) 1) 170頁4行、2) 169頁8行、3) 167頁15行、4) 168頁5行、5) 170頁4行、6) 168頁4行、7) 167頁13行、8) 167頁10行、9) 167頁12行、10) 167頁10行、11) 167頁9行、12) 168頁11行、13) 168頁13行、14) 168頁13行、15) 169頁1行、16) 169頁2行、17) 169頁4行、18) 169頁4行、19) 169頁5行、20) 169頁7行、21) 169頁10行、22) 169頁11行、23) 169頁12行、24) 169頁12行、25) 169頁12行、26) 169頁13行

* 『岩波哲学思想事典』(2010. 3. 5 岩波書店) 992頁L 「存在 [ハイデガー]」

II 哲学的問い：「自己は自己の中に自己を映す」とはどういう事態か図示のうえ説明せよ。

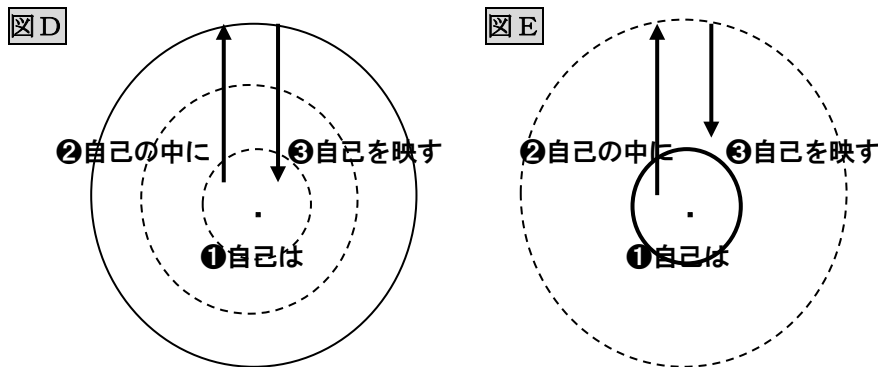


《説明》※以下の引用[西田:四]は『西田幾多郎全集 第四巻』(旧版 1965 年刊)

【図A】『日本の哲学をよむ』043 頁[田中久文:ちくま学芸文庫]の図参照(ゴシック体部分は私見)。「自己は自己の中に自己を映す」[西田:四-127 頁]という命題のねらいは、「知るものは、すべて自己の内に於いて知る」ところの「内部知覚」であり、「我々の知覚に内と外とかいふ區別のあるのではない」[西田:四-127 頁]ということ。その上で、「(純粹現象学的立場も)種々なる世界の本体を内に見ることができ、客観的知識を基礎付けることができる」という一文で、「独我論」を脱す。後は、語順に従い、「自己の内容を順次に知り行く」[西田:四-127 頁]、「主語→述語」の方向性の「主語主義」である。

【図B】ところが、同著の「場所」の記述を先回りして見ると、「我とは主語的統一ではなくして、述語的統一でなければならぬ、一つの点ではなくして一つの円でなければならぬ、物ではなく場所であればならぬ」[西田:四-279 頁]……、とこれまでの主客は見事に逆転している。「映す」は「見る」に変わったり変わらなかったりする。

【図C】そして、ついには「主語面が深く述語面の底に落ち込んで行き、「術語面自身が主語面」となり、「術語面が自己自身を無に」して、「単なる場所」となる[西田:四-283 頁]。「すべてのものの根底に見るものなくして見るものといふ如きものを考えたい」[西田:四-5-6 頁]という西田の意図が垣間見える。即ち「見るもの」である主語が脱落し、「見るものなくして見るもの」たる述語のみで、事態を自律的に自己組織化する「術語主義」の場が現出する。而して、「有るもの働くもののすべてを、自ら無にして自己の中に自己を映すものの影と見るのである」[西田:四-頁]。今回のプロトコルで整理した「意志→直観→表現」の構造は、この「場所」において成立するものと思われる。



【図D】前掲書[田中037 頁]に、「絶対自由意志」は、「無より有を生ずる点」であり、「創造の無から来って創造の無に帰り去る」という記述がある。この説に、設問の執拗な同語反復を重ねると、自己はエネルギー密度無限大の特異点であり、あたかもおのれの中に

「空間」も「時間」も創造し、あるいは自ら時空そのものとなって、その「場所」で展開する自作自演

の一切の現象を明滅させる。これが、「生成＝消滅」を無限に繰り返す、「自己＝宇宙＝純粹経験」の完全モデルと決め付けてはいけないか。なお、図形の外は「絶対無」、点が「無」、円が「有」。

【図E】 これに対し、我々の宇宙は不完全であり、「絶対的対称性の破れ」即ち「生成＞消滅」の不均衡によって零れ落ちた。この「余剰」が現宇宙であり、俗世であり、かつ「(通常)経験」の世界である。